

囲碁にまつわる言葉 【爛柯】

「親の死に目に会えない」といって碁を打つ人に反省を促す言葉があります。碁打ちは時の経過を忘れがちで、囲碁ファンなら誰でも身に覚えがあることです。今は、時計を使って「長考」を止めさせる工夫をしています。アマの対局は一時間以内で終わらせたいものです。「爛」とは腐る、「柯」とは斧の柄のことです。

----- 【爛柯】 -----

【爛柯】とは、囲碁に没頭してしまい時間の経過を忘れるという用語です。中国南朝の梁王朝時代に作られた「述異記」というに載っている物語からの話です。「述異記」は、梁王朝の任昉が撰したとされる山川等地理に関する異聞や、珍しい動植物に関する話などを多く集めた小説といわれます。

あるとき、王質という木こりが洞窟の中で、童子たちが集まって、碁を打ちながら歌をうたっているのを見つけます。木こりがその歌に聴き入っていると、子どもたちはナツメの種のようなものをくれます。それを食べた後は、飢えをまったく感じません。しばらくたって、ふと「斧の柯を視みれば、爛尽す（手に持った斧の柄を見てみると、腐ってぼろぼろになっていた）」。びっくりして自分の村に戻ってみると、何十年かが過ぎ去っていて、知り合いはすべて亡くなっていたということです。こうした時間の喪失感という物語のテーマは、浦島太郎でも使われています。



世界には、時を忘れて時の経過に驚くといういろいろな話があるようです。人間の命、生き方、考え方の特徴は「爛柯」そのもののようです。「勝った、負けた」といって一喜一憂するのではなく、「爛柯」のように囲碁の面白さを感じる事ができたらどんなに幸せなことでしょうか。

2021年10月28日

大和田囲碁同好会 成田 滋